

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	千葉県
-------	-----

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	千葉県館山市立館山小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数 33
学級数	4	3	3	3	3	3	4	23	
児童数	121	84	114	90	101	89	17	616	

II 研究の概要

1. 研究主題

進んで学習する子の育成をめざして
 — 基礎基本を楽しく学べる教育課程のあり方 —

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

(1) 実施学年・教科
 1年生～6年生
 <算数>
 個人差が大きい教科で、各学年ごとの理解の状況に大きく差が出る教科である。
 <国語>
 全ての学習のもととなる力を育てる教科である。（読む・書く・話す聞く）
 <総合的な学習の時間>
 各教科で培った力をいかす時間である。
 今後、生きていく上で必要な新しい学習スキルを身につける場であるため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度

○テーマ
 「全ての子どもに確かな学力を保障する教育課程・指導方法のあり方」
 — 全ての子ども達に算数の確かな学力を身につけさせる —

○仮説
 基礎的な学力Aと基礎的な学力Bが両輪となり機能することにより確かな学力が身に付いていくであろう。

(1) 基礎的な学力A
 これは、「読み・書き・計算」といった学力であって、教科等の学習の基礎となるものである。この学力は、学校教育ばかりでなく、将来の社会生活の基盤となるものである。このような基礎的な学力を身につけるためには、「繰り返し学習」や「ドリル学習」などにある程度の時間を費やす必要がある。

(2) 基礎的な学力B
 これは、学習指導要領で明示されている目標と内容に基づく教科等の学力である。これらは、子どもが学習すべき最低限の基準である。したがって、基礎的な学力Aの育成の場合と同様に、いくつかの教科の授業では、必要に応じて習熟度別指導を導入するなどの学習集団の弾力化によって全ての児童に基礎的な学力Bを身につけさせなければならない。

○研究方法・内容
 ・研究方法
 基礎的な学力A・Bをつけるための取り組みを以下のように考えた。
 ア 基礎的な学力A
 教材作成（習熟プリント）

時間割の工夫（朝自習・モジュールでの取り組み）
家庭学習の取り組ませ方

イ 基礎的な学力B
少人数指導（習熟度別学習）TT授業の組み合わせ
個々の教師の授業改善

・研究内容

算数を中心とした取り組み
組織による取り組み

モジュール・・・朝自習・基礎基本の時間の設定
学習システム・・・少人数（習熟度）の研究
算数教科部会・・・指導案，問題解決学習，算数科における基礎基本
学年部会
指導計画細案の作成（少人数制を加味した）
少人数制，TT授業の実践
検証授業（指導案を作り，研究授業を行う）

平成
15
年度

○テーマ

「進んで学習する子の育成をめざして」
—— 基礎基本を重視しつつ教科の本質に触れさせ、楽しさや学ぶ意欲を
持たせ確かな学力を保障する教育課程・指導方法のあり方 ——

○研究の見通し（仮説）

<基礎基本の定着>

①基礎的な学力Aと基礎的な学力Bが両輪となり機能することにより確かな学力が身につくであろう。

<評価・・・指導と評価の一体化>

②評価基準を明確にし、評価と指導の一体化に取り組んでいけば、個への対応を確実に行うことができ、一人一人に確かな学力を身につけさせることができるであろう。

<教育課程編成上の工夫>

③日課表の工夫、学習時間等の弾力化、指導形態の工夫を行っていけば、十分な指導時間の確保・学習の効率化が図られ、確かな学力を身につけることができるだろう。

※日常の教科学習を工夫し、教科の本質に触れさせ、楽しさや学ぶ意欲をもたせていくことで達成できると考えている。それにより、「やればできる」「やってできた」という「できる」手応えを感じさせることができる。そのためには、教師側が教材教具の開発・授業改善（指導法の工夫、指導形態の工夫、指導内容の工夫）を授業の中に組み入れていくことで、子ども達が意欲的に学習し、質の高い授業により、確かな学力を身につけていけると考える。

各教科における「確かな学力」の具体化

(1) 基礎学力A

・算数においては、計算を学習の基盤になるものとして考える。
・国語においては、読書・音読（読む力）漢字（書く力）を学習の基盤になるものとして考える。
・体力面の増強や心の教育を生涯学習を支えていく健康維持の基盤になるものとして考えた。

※授業時間とそれ以外の時間（教育課程編成上生み出した時間）で習熟・定着させていくものとする。

※基礎学力Bを支える基盤となる学力である。
（毎日の授業を支えるもととなる学力）

(2) 基礎学力B

・各教科については、年度当初の各教科主任の提案により、大切にしてい
く部分を明らかにし、共通理解のもと毎日の授業を進めていく。

・TT・少人数による学習形態の工夫（算数を中心にして）
※主に日常の授業で身につけていくものであるとする。
※わかる授業を目指し、子ども達の意欲化をはかる。

(3) 発展的な学習

※ 学習指導要領の目標と内容をさらに発展させたり、必要に応じて複数教科等の関連づけをはかるような教科等の学力である。発展・補充的な学習もこの部分にあたる。

・算数において、文部科学省が示した内容を中心に導入を検討する。

(4) 実践的な学力

※教科等で身につけた学力をふまえながらも、教科の枠を超えて、現実の社会課題や自らの生き方に関わる課題を発見し、解決しようとする学力である。総合的な学習は、まさに、この学力を育てることにある。

・総合的な学習の時間を考え直し、再構成を行う。具体的に各教科との関連をはかりながら全体計画の作成を行う。

・各学年の内容について、昨年の反省をもとに、考え、修正を加えていく。

・105時間の時間構成を考え直す。

(英語、情報の時間については必ず組み込んでいく)

・基礎基本の時間(算数国語についての補充の時間の特設)の設置について考える。

・学年内容と学級内容(白紙プラン)についての内容を明確にしていく。

(5) 国語学習について(コミュニケーション能力をつける柱の教科として)基礎的な学力Bについて、各教科授業の中でつけていくものとして規定したが、実際の授業の中で各教科の目標を着実に達成していくために、最も重要になって来るものがコミュニケーション能力であると考え。本校では、この能力の基礎を身につける教科を国語とし、各教科の基盤となる力を身につける教科であると位置付けた。(ただし、国語以外の教科では、有効な手段であって、それ自体が目的にはならない。国語科では、音声・文字言語両面から高めていこうとしているが、本研究では、音声言語を中心として考えている。)コミュニケーション能力とは「話す・聞く」技能であり、「自分の考えや思いを相手に伝える」ことである。活動としては、自分の考えを表現したり、友達の考えを読み取ったり、話し合ったりすることを通して、相互に啓発しあい、考えを深めていく活動のことである。

ただ、本研究では、コミュニケーション能力だけをとりたてて扱おうとしているが、この他にも書く力、読む力など各教科の基盤となる重要な力である。そのため、基礎学力Aの部分で中心に扱うものとする。

○研究の内容

学力向上部会

<評価、情報部会>

・各学年、各教科について評価基準の作成を行った。また、算数については、①授業中に行う教師の評価②授業後、児童が行う3段階評価③感想や意欲を含めた算数日記など毎日の算数授業に取り入れていくことを確認し、実践している。

・児童の国語・算数に対する意識調査を行い、算数については、文部科学省の調査結果との比較を行った。

・昨年度の学力テストの計算領域における定着度の調査を行った。計算領域に関して、千葉県標準学力テストの定着度調査(昨年度の学力テストの内容が次学年においても定着しているかどうかについて調査)

<基礎基本部会>

・各学年、朝自習として週2回の算数と週2回の国語を行うこととした。
・基礎基本の時間を設定し、学年をこえた内容についても取り組めるようにする。

算数・・・各学年の計算内容の基本的な部分を30のプリントにした。足し算・引き算・かけ算・わり算・分数のチェック項目をつくり、子ども達自身も進捗や到達度を把握していけるようにした。

国語・・・読書の時間とし、各学年にブックリストを作り、計画的な読書をするようにした。

館山小学校ブックリスト→図書室の蔵書・ない場合は購入図書を中心に1年～3年、4年～6年のブックリストを作成した。カード式として、子ども達がチェックできるようにした。

<教科推進部会>

算数部会

①習熟度別少人数に対応した全単元の全体指導計画の作成

②習熟度別少人数学習に対応した指導案の作成

③学習形態について

- 全ての授業を少人数・習熟度別学習にするのではなく、単元の中で、内容・場面・効果によって、少人数・習熟度・TT学習を使い分けていく必要がある。

国語部会

国語科の学習が他の教科学習の基盤となるならば、日々の授業を充実させる必要があるという観点で研究を進めていく。

- ①今後の国語運営の方向性の決定
- ②授業実践による教師の授業改善

総合的な学習部会（本校では総合的な学習の時間を「ふれあい」としている）

- ・ふれあい学習の推進と本年度の実践の記録（指導計画・指導案・子どもの姿）
- ・既存のふれあい学習の改良 4年・5年実践
- ・各教科との関連のについて検討し、全体計画の作成
- <学習スキル>
- ・各教科との関連をはかる。（教科で培った力を明らかにする）
- ・将来に必要なスキルを英語教育とコンピュータ活用能力とし、活動計画、認定カードを活用した。
- <総合学習実践単元>
- 3年「発見！城山」 4年「めざせ！名人」 5年「私たちの市町村合併」
- 6年「いろいろワールド」

平成16年度

○テーマ

「進んで学習する子の育成をめざして」

—— 基礎基本を重視しつつ教科の本質に触れさせ、楽しさや学ぶ意欲を持たせ確かな学力を保障する教育課程・指導方法のあり方 ——

○研究の見通し（仮説）

<基礎基本の定着>

- ①基礎的な学力 A と基礎的な学力 B が両輪となり機能することにより確かな学力が身につくであろう。

<評価・・・指導と評価の一体化>

- ②評価基準を明確にし、評価と指導の一体化に取り組んでいけば、個への対応を確実に行うことができ、一人一人に確かな学力を身につけさせることができるであろう。

<教育課程編成上の工夫>

- ③日課表の工夫、学習時間等の弾力化、指導形態の工夫を行っていけば、十分な指導時間の確保・学習の効率化が図られ、確かな学力を身につけることができるだろう。

○研究内容・方法

学力向上部会

<評価・情報>

- ・評価基準の見直しと評価方法の確立
- ・児童の意識調査
- ・児童の学力調査

<基礎基本>

- ・朝自習の充実 基礎基本（算数・国語・読書）
- ・算数基礎プリントの改良
- ・国語基礎プリントの作成
- ・読書 ブックリストの見直し

教科推進部会

<算数部会>

- ・全体指導計画の見直し（本年度の児童の実態に合わせ、学習形態・内容について考え修正していく。）
- ・教材教具の工夫、作成（含む 算数の生活化、体験活動の組み込み）
- ・問題解決学習の更なる研究と実践
- ・コミュニケーション活動を重視した授業実践
- ・評価基準の見直しと評価方法の確立

<国語部会>

- ・全体指導計画の作成と見直し
- ・コミュニケーション活動を重視した、日々の国語授業の充実
- ・コミュニケーション能力を培う核となる単元学習指導案の作成
- ・評価基準の見直しと評価方法の確立

<総合的な学習の時間>

- ・総合全体計画の見直し
- ・各実践の見直し
- ・ポートフォリオ評価の実践
- ・他教科との関連についての見直し

(3) 研究推進体制

○研究推進委員会－研修の方向性を検討する。全体会の企画・運営・実践・研究授業等計画の企画運営

○全体会－研修についての最終決定の場・理論研修・共通理解

○専門部会－確かな学力をつけるための環境・研修を考えていく部会
それぞれの活動についての取り組みを考え、実践

・教育環境部会－①学習システム
少人数・習熟度別・課題別・地域人材活用などの可能性や実施方法の検討

②モジュール学習（時間割・教材作成）
モジュール学習による時間割の工夫とスモールステップによる系統性を考慮した基礎作りのための教材作成
調査統計（児童の実態調査・評価テスト作成・県調査集計など）

③算数（教科）部会（教科研修・評価基準作成）
教科指導の充実をはかり、館山小としての算数指導を確立する
教科研修部への基礎資料の提供

・教科研修部会－①低学年教育部
②中学年教育部
③高学年教育部
④障害児教育部

※算数について教師の力量を高めるための授業研究（指導案検討・授業実践）

（7月～3月）
<教科推進>

○算数部会 少人数担当 各学年1名 今後の算数運営と研究授業の推進
少人数（含む習熟度）学習の推進
館山小学校の算数指導の確立

○国語部会 各学年1名 今後の国語運営と研究授業の推進
国語における基礎基本
館山小学校の国語指導の確立
コミュニケーション能力を育てていく授業実践の推進

○総合的な学習部会 ふれあい学習の推進と本年度の実践の記録
（指導計画・指導案・子どもの姿）
3・4年生への協力（実践内容の検討）

III 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

○学力向上部会

評価について

①授業中に行う教師の評価

観点を決め、エクセルで作った表で、評価していった。
利点として、パソコンを使い、評価を集約することができること。少人数学習などで複数の教師が指導した場合、同一評価観で行った評価を参考にできるので、打ち合わせ時間が短くてすむことである。

②授業後、児童が行う3段階評価・児童の理解、意識を把握し、次時の授業に生か

すことができた。
 ③感想や意欲を含めた算数日記・・・児童の理解度を把握して、次時の授業に生かすことができた。

<1年算数 「引き算」の評価カードの例>

氏名	番号	1. 10以内の引き算が いっぺんにできるか	1. 10以内の引き算が おぼつかないか	1. 10以内の引き算が おぼつかないか	1. 10以内の引き算が おぼつかないか	1. 10以内の引き算が おぼつかないか	1. 10以内の引き算が おぼつかないか	1. 10以内の引き算が おぼつかないか
	1							
	2							
	3							

調査について

①算数についての意識調査

1. 算数は好きですか								
	3年生		4年生		5年生		6年生	
	8月	1月	8月	1月	8月	1月	8月	1月
とても好き	40%	41%	29%	28%	32%	34%	32%	27%
少し好き	45%	44%	46%	42%	53%	43%	37%	41%
好きではない	6%	12%	12%	20%	10%	16%	19%	23%
きらい	9%	3%	13%	10%	5%	7%	12%	9%

2. 算数は楽しいですか								
	3年生		4年生		5年生		6年生	
	8月	1月	8月	1月	8月	1月	8月	1月
とても楽しい	43%	41%	32%	32%	31%	40%	29%	21%
少し楽しい	42%	44%	54%	48%	55%	42%	42%	60%
楽しくない	8%	12%	5%	17%	12%	14%	26%	14%
つまらない	7%	3%	9%	3%	2%	4%	3%	5%

3. 勉強していることがわかりますか								
	3年生		4年生		5年生		6年生	
	8月	1月	8月	1月	8月	1月	8月	1月
よくわかる	33%	35%	28%	26%	21%	25%	17%	23%
だいたいわかる	42%	48%	34%	42%	61%	48%	52%	47%
半分くらいわかる	17%	11%	27%	28%	16%	22%	24%	25%
わからないことが多い	3%	5%	7%	3%	1%	5%	5%	4%
ほとんどわからない	5%	1%	3%	1%	1%	0%	2%	1%

(考察)

- ・前年度に比べ、全体的な数字は、向上している。15年度の調査では、8月と1月との変化は、あまりないものの、1については、8月では、「嫌い」と答えた割合が、3年・4年・6年と減っている。
- ・2については、対象学年で80%以上の児童が算数の授業を楽しんでいることがわかる。
- ・3については、対象学年で70%～80%以上の児童が算数の授業を「わかる」と感じている。「よくわかる」「だいたいわかる」をあわせて考えた。「ほとんどわからない」と感じている児童が全ての学年で減っている。

以上のことから、本学校が行っている、授業形態の工夫（習熟度別少人数）・教材教具の工夫・基礎基本の時間など「わかる・楽しい授業」を目指した取り組みが効果をあげていることがわかる。

②定着度調査

- ・昨年度の学力テストの計算領域における定着度の調査を行った。計算領域に関して、千葉県標準学力テストの定着度調査（昨年度の学力テストの内容が次学年においても定着しているかどうかについて調査）

※これにより、基礎学力Aの定着度を調査する。

<結果>

平均正答率			
<問題数 各学年8問 千葉県標準学力テスト 表現処理の計算領域 >			
2年	98, 3%	5年	92, 5%
3年	97, 3%	6年	84, 0%
4年	88, 2%		

(考察)

- ・全学年80%～90%の正答率だった。
- ・2年、3年については、8問中、そのほとんどが100%であった。

以上のことから、前年度に学習した内容が次年度でも十分に定着していたことがわかった。

定着の理由として、朝自習、基礎基本の時間などでの計算領域での学習の成果であると考えられる。

③その他 (2月下旬～ 実施予定)

- ・国語の意識調査
- ・学力調査
- 県標準学力テストによる調査 国語・算数

<基礎基本部会>

- ・各学年、朝自習として週2回の算数と週2回の国語を行うこととした。
- ・基礎基本の時間を設定し、学年をこえた内容についても取り組めるようにする。
- 算数・・・各学年の計算内容の基本的な部分を30のプリントにした。
足し算・引き算・かけ算・わり算・分数のチェック項目をつくり、子ども達自身も進度や到達度を把握していけるようにした。
- 国語・・・読書の時間とし、各学年にブックリストを作り、計画的な読書をするようにした。
館山小学校ブックリスト→図書室の蔵書・ない場合は購入図書を中心に1年～3年、4年～6年のブックリストを作成した。カード式として、子ども達がチェックできるようにした。

かけ算 チャレンジ

項 目	5月	6月	7月
かけ算 5のぞん	51		
かけ算 2のぞん	52		
かけ算 3のぞん	53		
かけ算 4のぞん	54		
かけ算 6のぞん	55		
かけ算 7のぞん	56		
かけ算 8のぞん	57		
かけ算 9のぞん	58		
かけ算 1～9のぞん	59	60	
10のかけ算・0のかけ算	61		
あやあや九九	62		
かけ算のひっさん(1)	81	82	83
かけ算のひっさん(2)	84	85	86
かけ算のひっさん(3)	87	88	89
かけ算のひっさん(4)	90		
小歌のまじ方	121		
小歌と算数のしくみ	122	123	124
小歌のかけ算(1)	125	126	
小歌のかけ算(1)	127	128	
小歌のかけ算(2)	137	138	

おすすめの本～館山小学校ブックリスト～

◎本は心の栄養です。ぜひこれだけは読んでおきたいですね!

№	本の題名	作 者	出版社	ある場所	読んだ日
1	いじめいじめ	宇山 幸枝子	福音堂		
2	いっせんぼんし				
3	うまかたやまんぼ				
4	うちまをらう	福音堂の	福音堂		
5	かちかちのやま	野ばなし			
6	おつぱのうぼう	おはなし			
7	したたりずすめ	うた			
8	だごだごころこ	うた			
9	つるばうぼう				
10	みるめくら				
11	なむらう				
12	あやあや九九				
13	おはなをたのしみなさい	一色 久子	福音堂	読本の部屋	
14	おじさんのあひ	さの ようこ	福音堂		
15	おぼく	藤田 純子	福音堂		
16	おやあひ	藤田 純子	福音堂		
17	しょうぼうじどうしゃとぶた	渡辺 茂男	福音堂	読本の部屋	
18	はなみくんのチョッキ	なか よしを	ポプラ社		
19	のりまなローラー	小田 武吉	福音堂		
20	ぼんぼりのつらつら	奥野 順子	福音堂		
21	おひさまのこぼれがらすま	藤田 純子	福音堂	読本の部屋	
22	てぶくろ	クワダマサ晴	福音堂		
23	おんこハリー	ワイルド	福音堂		
24	はらこおぼれ	カール	福音堂		
25	大巻一歩とよきなつ先生	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	
26	おはなをたのしみなさい	さとうあさ子	福音堂		
27	かきこて	岩間 辰巳	ポプラ社	読本の部屋	
28	かみかみ	岩間 辰巳	ポプラ社	読本の部屋	
29	かみかみ	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	
30	かみかみ	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	
31	かみかみ	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	
32	かみかみ	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	
33	かみかみ	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	
34	かみかみ	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	
35	かみかみ	岩間 辰巳	福音堂	読本の部屋	

<かけ算カード例>

スモールステップの20枚のカード
番号はプリント番号 終了後、教師がチェック

<高学年のブックリストの一部>

「千葉県この本大好きな会」の推薦図書
を参照に選定したもの

<学力向上部会>

算数部会

①習熟度別少人数に対応した全単元の全体指導計画の作成

全単元の全体計画の作成を行った。習熟度別少人数・少人数・一斉 TT 学習など教材の特性に合わせた、それぞれの指導計画である。これにより、各学年の年度当初の教科計画が立てやすくなり、これを基に、各学年の実態に合わせた指導が可能になった。年度終了後、反省を基に改善を加えて次年度に送っている。

②習熟度別少人数学習に対応した指導案の作成

昨年度から、習熟度別少人数学習に対応した指導案作りを行っている。特色として、単元の全時間の指導計画細案を習熟度別に作成したことにある。パソコンに保存してあるので子どもたちの実態に応じて簡単に作り替えていける。

1年 たし算(2), ひき算(2) 2年 かけ算(1), かけ算(2)
3年 かけ算の筆算, あまりのあるわり算 4年 わり算(2), 分数
5年 面積 円の面積 6年 分数のかけ算 分数のわり算
特殊学級 図形

③学習形態について

全ての授業を少人数・習熟度別学習にするのではなく、単元の中で、内容・場面・効果によって、少人数・習熟度・TT学習を使い分けていく必要がある。

<少人数・習熟度別学習が必要な場面>

- ・内容の理解に大きな差がある児童が数人いる場合
(スモールステップが必要な児童がいる場合)
- ・本単元の内容を学習するために、既習事項を復習する必要のある児童がいる場合
- ・習熟をはかる必要がある場合。
(習熟をはかる子と発展的な問題を進める子との到達レベルが違う場合)
- ・単元の終末段階で、少人数でのコース学習を行う場合

<TT学習 一斉学習が必要な場面>

- ・多様な考えを出し合い、広める学習を行う場面
- ・体験や操作活動が中心の授業を行う場面
- ・一斉のスタイルを取りながら、数人の教師が担当する児童を決めて、個別指導を行う場面
- ・年度当初、教師がまだ、子どもたちの把握ができていない場面

<小集団学習 一斉学習と小集団学習との組み合わせる場合>

算数的コミュニケーション活動(自分の考えを算数的に表現したり、友達の考えを読み取ったり、話し合ったりすることを通して、考えを深めていく活動)を重視した授業を行う場面

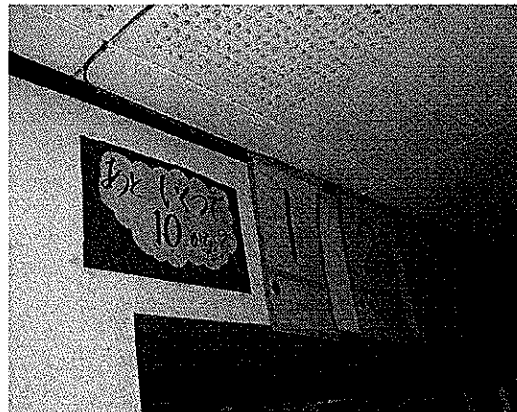
- ・自分の考えを表現する場を作る。(自分の考えを明確化する・・・途中まででもよい)
- ・双方向の話し合い活動を組織する。自分と違う考えに触れ、自分の考えをふり返り、考えを修正したり、深めたりする。

④学習環境について

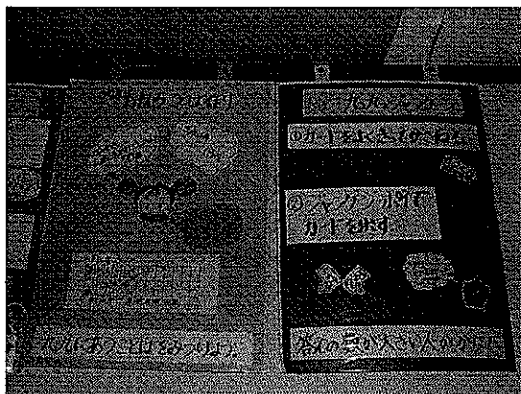
各学年、算数の生活化・日常の学力向上を目指した環境作りを行ってきた。

<1年生>

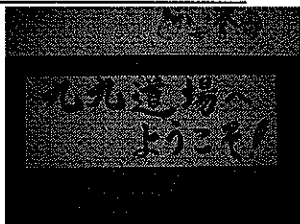
算数ワールドによる足し算・引き算の環境



< 2年生 > 算数ランドのかけ算コーナー

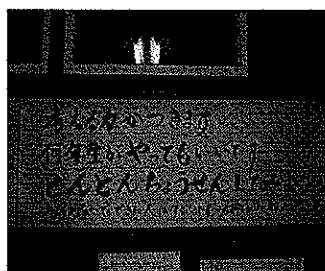
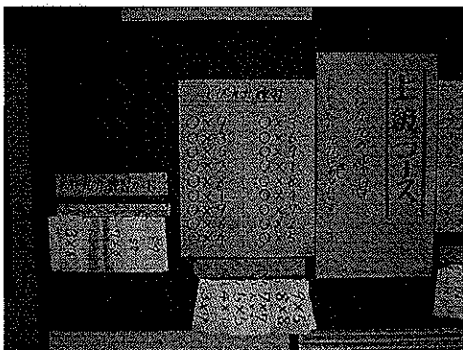


< 3年生～6年生 >
九九道場のコーナー



苦手な子が休み時間に
やってきて九九の基礎
基本をこの道場で学ん
でいく。
3年生が中心に学ぶ。

頭の体操コーナー



算数の興味関心を
高め、考える力を
つけるため、何年生
がいても良いこと
なっている。紹介・
認定者なども行っ
ている。

国語部会

①今後の国語運営の方向性の決定

○音声言語によるコミュニケーション能力の育成

コミュニケーション能力は、日々の授業において、育てられると考える。しかし、確実に身につけさせていくためには以下の3本の柱を中心にして育てていきたいと考えた。

柱1 「話すこと・聞くこと」領域において、意図的計画的に指導していく。

柱2 「読むこと」領域の中で説明的文章を取り上げて、単元学習として展開していく。

Aパターン 主教材読みとり中心の単元

Bパターン ある問題に関する追求のための情報収集・活用を中心とした単元

柱3 「言語事項」についての全学年の目標・内容の作成

②授業実践による教師の授業改善

<柱1の実践として> 総合との関連の濃い教材

1年「あさごはんはおおさわぎ」 3年「オリジナル絵文字」

2年「楽しい話し合い」 4年「広がる話し合い」 5年「日本語再発見」

<柱2の実践として>

5年「日本語再発見」(パターンB)

6年「ディベートで探ろう人類の未来」(パターンA)

2年「楽しい話し合い～きつつき～」(パターンA)

総合的な学習部会

- ・ふれあい学習の推進と本年度の実践の記録
(指導計画・指導案・子どもの姿)
- ・既存のふれあい学習の改良 4年・5年実践
- ・各教科との関連のについて検討し、全体計画の作成

<学習スキル>

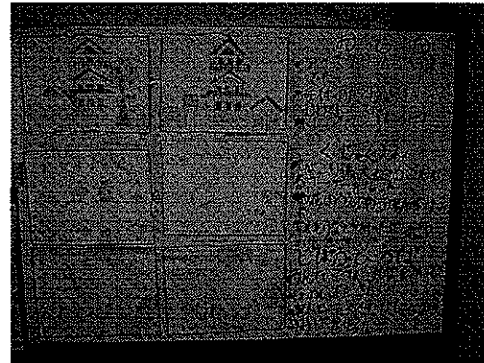
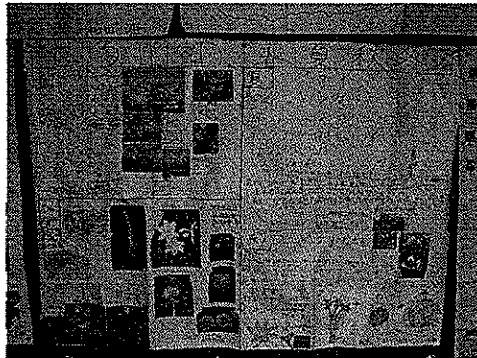
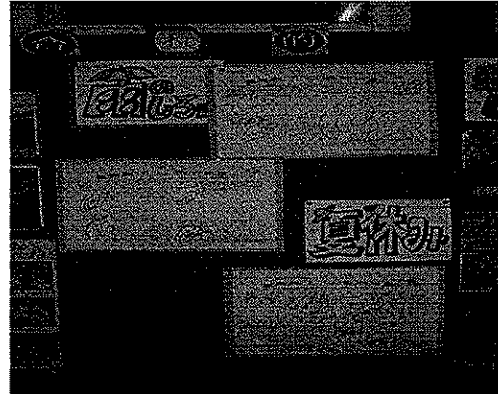
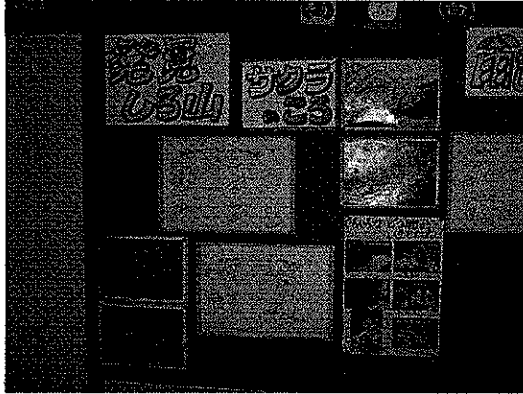
- ・各教科との関連をはかる。(教科で培った力を明らかにする)
- ・将来に必要なスキルを英語教育とコンピュータ活用能力とし、活動計画、認定カードを活用した。

<総合学習実践単元>

- 3年「発見!城山」 4年「めざせ!名人」 5年「私たちの市町村合併」
- 6年「いろいろワールド」

<3年生の発見城山の実践>

テーマを持たせるため、城山(学校の近くの城跡を整備した公園)へ子ども達と出かけ活動した各季節の様子を掲示したもの



城山の四季を植物を窓口にまとめた

城山の環境についてまとめた

2. 今後の課題

1. 学力向上を中核とした教育課程づくり(学力向上を全教育活動を通じて達成する)

学力向上を目指した場合、教育課程をどう考え、どう編成していくかが重要である。本年度の本校の大きな課題として、考えていかなければならない。そのためには、全ての教科領域で子どもを育てていくことを前提に教育課程の編成を行っていく。また、健康維持・体力増進の部分でも考えていく必要がある。

2. 2教科1領域を中心に研究を行っていく。

国語・算数・総合的な学習の時間を算数と共に研究していく。

<国語>

- ①全ての学習のもととなる力を育てていく教科であることを前提にそれぞれの力をどう育てていくか考え、教科の全体計画の中に位置づけていく。
コミュニケーション能力-話す聞く力
- ②実態として本校の児童に欠けている力であり、我々教師も十分に育て切れていない教科であるため、実践授業研究による指導力の向上。

<算数>

○指導方法の多様化

算数を中心にした少人数指導（習熟度別）を昨年度から考え実践しているが、それぞれのコースにあった。指導形態・指導方法を更に工夫する必要がある。また、教材教具の工夫も行い、子ども達にとって魅力のある教材にしていかなければならない。

<総合的な学習の時間「ふれあい」>

各教科の力の応用・発展として総合的な学習の時間「ふれあい」を研究領域とした。

この後方向として、各教科と総合的な学習との関連をはかる必要がある。総合的な学習の時間が各教科で培われた力を発揮する場であるなら、それぞれの力をどう生かしていくのかを明らかにしていかなければならない。その意味で、各教科との関連を明らかにしていくことが重要である。

3. 補充・発展学習にむけての対応

本音度は、オープン学習の中で実施したが、更に、各教科の中でどう生かしていくかが課題である。

4. 評価基準と評価方法の再検討

指導と評価の一体化を図る点に関して、評価基準と評価方法を再検討する必要がある。

IV 学力等把握のための学校としての取組

1. 意識調査

国語・算数について、年度の初め・年度の終わり2回、その教科に対する児童の意識の変容を調査する。

2. 学力調査

①定着度調査

前年度行った学力テストの計算領域について、その定着を調査する。時期は、9月に行う。

②千葉標準学力テスト

千葉県が行う学力調査。国語・算数・社会・理科の4教科で行う。（1・2年生は国語・算数のみ）時期は、2月下旬。

③千葉県学力調査

本年度から行うことになった調査。国語・算数に関して、問題を選択して行う予定。時期は、3月上旬に行う。

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・来年度（2004年）、12月3日に公開研究会を予定している。
- ・昨年度から研究授業を行う際に、近隣の学校に研究案内をし、授業参観の希望者に授業の公開を行っている。
- ・館山市のホームページに研究の成果を掲載している。
- ・館山市の場合、中学校区の1中学校と4小学校で研究を行っているため、学校規模に応じた交流を行っている。

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上

【指導体制】 少人数指導 T. Tによる指導
 一部教科担任制 その他

【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無